

空手道詳説（27）

第2章 沖縄史の概説

4 沖縄史の概略（その5. 薩摩藩の琉球侵略）

（4）敗北の結果

④ 琉球側から見た謝名親方

ア 謝名親方抵抗の情勢

ここでは、琉球側から見た謝名はどのような存在だったのか考察するが、まずはじめに、謝名が徹底的に日本を忌み嫌った当時の情勢である。説明上、これまで述べてきたところと、一部重複することお許しいただきたい。

明国と琉球の関係を簡単に復習するならば、最初に朝貢関係をもって国交を樹立させたのは三山時代（1322～1429年）の中山王察度で、1372年であった。その後、北山王、南山王も明国と朝貢関係を結び国交を開始している。後の1429年に、尚巴志によって三山が統一された。

特筆されるのは、文化文明の立ち遅れを危惧した察度王の要請を受け、国交開始から20年後の1392年、明国の計らいで「閩人三十六姓帰化」と呼ばれる有識者、有能者の集団移民が実現したことである。

帰化人たちは那覇の久米村に居住地を与えられ、彼らの貢献によって琉球は急速に国勢を発展させていった。謝名利山は、この帰化人の末裔である。

明国との朝貢関係は単に国交の正常化ばかりでなく、「朝貢貿易」といわれる物資の流通による利得をもたし、同じく明国に服属する南方諸国や朝鮮などと交易を可能としたことで、琉球は文化や学問の進展とともに財政も豊かになり、国民の生活も次第に安定するに至った。

琉球は、立地的には日本と明の間に位置しながら、いかんせん文化的な遅れが指摘される。遣唐使派遣にしても、北方の大陸沿いや東シナ海を直接横断する航路を多用し、沖縄本島を経由するコースは極めて少なかったのも、一因となるかもしれない。

前にも触れているが、日本との比較における琉球の後進性とは次表である。

項 目	琉 球	日 本
他国の歴史書への登場	7～8世紀	1～2世紀
政治的支配の発生	11～12世紀	紀元前後1世紀
存在が確かな支配者	12世紀	2世紀
文字の伝来と使用	13世紀	5世紀
仏教の伝来	13世紀	6世紀
鉄製農具の普及	14世紀	6～7世紀
国土の統一	15世紀	4世紀
暦制の始まり	15世紀	7世紀
中央集権的国家の確立	15～16世紀	7世紀
文学書の編集	16～17世紀	8世紀
史書の編纂	17～18世紀	8～10世紀

(新里恵二著「沖縄史を考える」37頁から転載)

一方、日本と明国との関係だが、室町幕府第3代将軍足利義満時代の1401年、両国合意に基づく日明貿易（勘合貿易という）が開始された。この貿易は、1559年に明の拒絶によって終了する。

勘合貿易が途絶えると、堺や博多の商人たちが品々を求め頻繁に琉球を訪れるようになるが、いずれも薩摩の周辺海域を航行せざるを得ない。

九州の最大勢力である薩摩の領主島津氏は、海防の理由をもって、島津氏の印判のない商人との貿易を中止するよう琉球に要求した。

その頃の島津氏は、九州平定を巡る争いや、豊臣秀吉の命による朝鮮出兵、関ヶ原の戦いなどによる出費が相次いだことによる財政破綻状態にあって、その脱出策として対外貿易の独占を狙ったというのが本意であろう。

しかし、琉球側にすれば、多くの商船との対外交易が利をもたらすことから、島津氏の要求を拒絶したため、琉球と島津氏との間に不和対立が生じた。

島津氏は、次なる策として琉球領の奄美を手に入れようと出兵を企てるが、1603年に征夷大將軍となった徳川家康は、奄美出兵には消極的で許可を与えなかった。理由として、明国への刺激を憂慮したためとされる。

その後、仙台藩への琉球船漂着問題で琉球が礼を欠いた事案など、家康の心境を変化させ、1606年になって島津氏の要求を容れると方針を転換した。

この時期琉球王府では、それまで久米村人（三十六姓帰化人）は三司官という最高官職に就けないのが決まりであったのに、謝名は、親日派の三司官・城間親方盛久（1542～1612年）を讒言して百姓の身分に貶め、翌1606年、自ら三司官に就任した。

謝名が就任当時、尚寧王、『謝名以外には、外交は任せられない。』と、口にして憚らなかつたというから、余ほど信頼を寄せていたに相違ない。

琉球侵攻を前にして、謝名が王に奏上した薩摩の懐柔工作の無視の他に、奄美割譲の要求に対し『昔より此国は、唐（明）に属し、日本とは各別なり…』と。更にこれに反すれば山は崩れ、船は海に沈むと述べたという。

こんなことが重なり、次第に薩摩側が強硬策に出る口実を作り、緊迫した情勢を招き遂に戦いの火ぶたは切って落とされた。

薩摩軍が侵攻を開始し、奄美諸島を制圧した後に先陣が運天港に到達すると、尚寧王は和睦の使者を派遣し、『那覇で和睦の談合を行う』と双方同意した後も、謝名は和睦反対を主張し続け、那覇港に3000名の兵士を集結させ、歴戦の精鋭ぞろいの薩摩軍に対し徹底抗戦に出たため、双方に多数の戦死者を出すなど戦況を拡大させてしまうが、結局は敗れて逃走する破目になる。

尚真王時代に武器の所持禁止（禁武政策）し、兵器の全てを王府の武器庫に収納してしまつた琉球国である。当然、日頃兵士の戦闘訓練はなく、王府から離れた地域では鉄砲の存在すら知らなかつた。

また、後に論じるが、人民の倫理観は比類なく高尚とされる国民性を持つ琉球である。所詮、勝敗を抜きにしても戦闘は無理であり、国王の意思に反し、刻々と情勢悪化を招いてしまつた謝名であつた。

以上のような謝名について、泉州堺生れで琉球の茶人として仕え喜安（1566～1653年）は、「喜安日記」の中で次のように残している。

「若那（謝名のこと）、童形のときより大明南京へ学問に渡り、年久しくして帰国せし故か、大和の風をしらざる故に、天下の大事に及びぬるこそうたてけれ」（榕樹書林発行、池宮正治解説「喜安日記」22頁）と、更に「今度琉国の乱劇の根本を尋るに、若那一人の所為なり。その上佞臣也」（「喜安日記」67頁）とある。前段の「天下の大事に・・・」は、「天下の一大事に至り、大変異常といえるひどいものであつた」の意味である。

また、後の1745年に編纂された史書「琉陽」には、「奈（いか）んせん、権臣謝名の言を信じ、遂に聘問（へいもん）の礼を失す」と記されているのは、王が謝名の言

葉を信じて家康への礼を欠き、征伐に繋がったと述べているのは、仙台藩への漂着船のことで、「聘問」は贈物をもって人をたずねる意である。

引用した二つの内、前者は事変時に琉球王に仕えていた日本人で尚寧王に従い薩摩にも同行している。後者は、薩摩藩支配後の史書である。

(つづく)

参考文献等（発行年月は著書に記載のまま）

- ・ 宮城栄昌著「沖縄の歴史」、昭和43年11月26日初版、日本放送出版協会発行
- ・ 新里恵二著「沖縄史を語る」、1970年9月1日初版、(株)勁草書房発行
- ・ 池田奉秀著「古流現代空手道集義第一巻」、昭和50年7月25日初版、日本空手道常心門出版部発行
- ・ 喜納大作、上里隆史共著「琉球王国のすべて」、2012年6月20日初版、(株)河出書房新社発行
- ・ 上里隆史著「オモシロ琉球・沖縄史」2011年6月25日初版、(株)角川学芸出版発行
- ・ 外間守善著「沖縄の歴史と文化」1686年4月25日初版、(株)中央公論新社発行
- ・ 比嘉朝進著「歴史・伝説にみる沖縄女性」2005年12月初版、那覇出版社
- ・ 「空手道・保存版」、執筆者・大塚博紀他31名、昭和52年3月初版発行、株式会社創造
- ・ 山里永吉著「首里城内の女たち」昭和47年4月20日初版、閣文社発行
- ・ 沖縄県教育庁文化課編集「中山世鑑」、昭和57年10月15日、沖縄県教育庁発行
- ・ 池宮庄治解説「喜安日記」、2009年4月28日榕樹書林発行